

別記

(書式1)【候補者用】

<p>① 立候補者の 姓名と所属</p>	<p>久保 英也 (クボ ヒデヤ) 滋賀大学大学院経済学研究科</p>
<p>② 立候補の理由 と 抱負 (400 字程度)</p>	<p>リスク研究や日本リスク研究学会を取り巻く環境が激変し、そこにうまく適合できていないことが本学会員の減少の一因ではないかと危機感を持っています。</p> <p>現代の豊かさとリスクは表裏一体で、グローバル化と科学技術の急速な進展はリスクを輻輳化、複雑化させています。また、自動運転やディープラーニング型人口知能や IOT などの「エマージングリスク」を生んでいます。そして、インターネットや SNS は、リスクを科学者の研究対象から市民の興味の対象に変化させ、リスクコミュニケーションが成り立たない状況さえ出現しています。</p> <p>このような広範な変化に対応するため、2017 年の年次大会 (於：滋賀大学) は、日本保険学会との連携大会とすることにより、本学会の強みである分野横断の強化を図りました。今後は、本学会の構えを再考し、更に魅力度を高めていかねばならないと感じています。このため、リスク学事典の編集などを通じ、本学会に欠けている分野や新たに踏み出すべき領域を明らかにしたいと思います。</p> <p>また、小生の所属する滋賀大学経済学研究科は、国公立大学最初のリスク専攻博士後期課程を有し、金融、経済、社会、環境分野のリスク研究に注力しています。これらを生かし、本学会を構成する各リスク分野に、例えば、新たなリスク移転方策などを提案するなど学会の新しい基軸を見出していきたいと思います。このような思いを実現したく、ここに理事に立候補いたします。</p>
<p>③ 本学会における活動歴</p>	<p>① 2010 年～2017 年度の同学会理事。2012 年度・2017 年度大会実行委員長</p> <p>② 2005 年、2006 年、2007 年、2008 年、2009 年大会報告。</p> <p>③ 「長期キャッシュフロー予測モデルの提案 —マクロモデル、利用した機関投資家のための信用リスク評価」『日本リスク研究学会誌』19 巻 4 号、2009 年 12 月掲載 (単著、原著論文)。</p> <p>④ 「死亡リスクと信用リスクの交換モデルの提案」『日本リスク研究学会誌』19 巻 4 号、2009 年 12 月掲載 (単著、原著論文)。</p> <p>⑤ 「On long-term credit risk assessment model and rating: Towards a new set of models」Society for Risk Analysis-Europe『Journal of Risk Research』共著、2011 年 11 月、pp.1127～1141.</p>
<p>④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)</p>	<p>1985 年 日本経済研究センター研究員 1987 年 The Conference Board(New York 在) 研究員 1993 年 日本生命相互会社 企画部部次長 1998 年 ニッセイ基礎研究所上席主任研究員 2001 年 生命保険協会調査部長 2003 年 神戸大学経営学研究科助教授 2007 年 滋賀大学大学院経済学研究科教授 (現在に至る)</p>

(書式2)【推薦者用】

① 推薦する候補者名	久保 英也 (クボ ヒデヤ) 滋賀大学大学院経済学研究科 教授
② 推薦者の姓名と所属	酒井泰弘 (サカイ ヤスヒロ) 滋賀大学名誉教授、筑波大学名誉教授、日本リスク研究学会元会長
③ 推薦理由 (400字程度)	<p>久保英也氏は、実業界とアカデミックの経験の双方を持ち合わせ、実務を通じたリスクに対する鋭い感性と計量手法を用いたリスク研究を実践する逸材である。リスクそのものや本学会を取り巻く環境が急速に変化している中で、再度学会の確固たる軸を探し出そうと奔走している。2017年度の滋賀大学における日本保険学会との連携大会の企画・運営やリスク学事典の編集業務の推進などを見てもわかるように、学会がさらに広がりを増し、研究水準を深めるには格好の人材であると考えます。</p> <p>本人の実績や大学での活躍、人柄の良さは論を待たない。著書8冊(うち単著4冊)、学術論文45本(うち、査読論文10編)、2009年に滋賀大学学長賞を受賞、2010年には滋賀大学就任3年目に滋賀大学リスク研究センターのセンター長など、華々しい活躍を示している。また、2011年に中国、韓国、ベトナムの3大学と個別に共同研究を進めたことが評価され、再度学長賞を受賞している。</p> <p>とりわけ、2013年4月にネイチャー系列のジャーナル「SCIENTIFIC REPORTS」に掲載された論文(共著)「Overview of active cesium contamination of freshwater fish in Fukushima and Eastern Japan」は、Altmetric Scoreが7,000を突破、同ジャーナルの創刊以来トップのアクセス数(同スコアを採用している世界のジャーナル190万論文の内、第2位)を記録し、国際的にもっとも影響力のある論文の1つとなった。</p> <p>このように、久保英也氏は、日本リスク研究学会の理事として必ずや活躍してもらえるものと確信し、ここに自信を持って推薦する。</p>